

株価がバブル水準に逆戻りする一方、昨年十月の確定拠出年金(日本版401k)導入、今年四月のペイオフ(定期預金などの払戻保証額を元本一千万円とその利息までとする措置)解禁などで株式投資への期待と必要性は高まるばかり。その舞台裏では、日本での実務経験を基に、高度な情報技術(IT)能力とMBA仕込みの経営手腕を備えた新しいタイプの「元証券マン」たちがビジネスチャンスを見据えている。

「フィデリティの『マゼラン』の最近の運用成績、ダーのインベステック(東京・港)を九八年に始めた連システムの企画・開発を、梶哲氏(36)もウォートン手掛けるアドバンストアイのMBA取得者。日興証券(東京・中央)社長、岡本 行生氏(33)の起業の原点は一九九五年、米ファイナルファイアのバスの中。とても裕福には見えない婦人がハンバーガー片手に話しかけてきた。

■MBA仕込み ■高いIT能力

当時野村証券からベンシルベニア大学ウォートン校に派遣中。金融ビジネス分野で著名な

「Wharton」のロゴ入りTシャツ姿に、見知らぬ女性が「一口投資アドバイス」を求めてきたのだ。岡本氏は「既に個人の日常生活レベルで投資情報の交換が定着していた」と振り返る。

帰国後、野村で新規業務立ち上げの道を探ったが、「急がないとチャンスに乗り遅れる」と九九年に起業。401k関連の投資教育ビジネスの準備や、事業リスクの定量化モデル開発などで顧客を広げている。

元証券マン 商機探る

アドバンストアイ 岡本 行生氏

ビジネスリスク
定量化にモデル



インベステック 梶 哲氏

金融技術に強み
幅広く応用狙う



シンプレクス ウィリアム・リー氏

トレーダー経験
投資教育に活用



きるだけ金融から遠くへ行こう」と、あらゆるビジネスのリスク管理システムの開発を目指す。MBA時代に培った「得意分野と離れ

てこそ、逆に強みが発揮される」との発想からだ。

「日本では投資的でウェットになりがちだが、投資は本来、リスク・リターンの概念に基づく論理的なもの」。ウィリアム・リー氏(42)の主張は明快だ。日本で生まれ育ち、シカゴ大学のMBAコースで「良くも悪くもビジネスライクな物事の見方」を学んだ。

ソロモン・ブラザース・アジア証券東京支店時代の仲間とともに、金融のプロ育成を目指すシンプレクス・インスティテュート(東京・千代田)を二〇〇〇年に設立。十年以上のトレーダー経験から、現場中心で技術の体得に主眼を置く従

来の証券実務教育に疑問を抱いていたからだ。

同社が開発した投資教育ソフト「LIVE」は、株式売買の一連の流れを仮想市場で体験できる。需給や材料で価格が変動する環境で売買スキルを磨く仕組みだ。「これからは個人もトレーダー」を念頭に、個人投資家向けのインターネット配信も検討している。

米でMBA取得後、日本で起業するケースはまだ多くない。だが、停滞気味の株式市場をよそに、投資の未来を切り開く動きは着実に広がっている。

(証券部 山本由里)